

《おすそわけマスク》

— コロナ禍の暮らしの中から共有のあり方を思索する —

前田博子

(2021年3月5日受理)

《OSUSOWAKE mask》

— Speculate about Commons in the COVID-19 Pandemic —

Hiroko MAEDA

はじめに

新型コロナウイルスという新たな災禍によって命の危険に晒された私たちはマスクを着用した生活を送らねばならなくなった。2020年3月ごろから市販のマスクは市場から消えたが公的な場所ではマスク着用が必須となった。そのためには、使用済みの使い捨てマスクを幾度も再利用する、もしくは新しくマスクを作らなければ外出できなくなってしまった。マスクの着用が必須とされるにも関わらず、売っていないというこの問題の直接的な解決はできないにしろ、経験や技術からデザインによる別の方法を思索し、この災禍と向き合うためのマスクをつくり、配布することにした。

本研究は大量生産されるものづくりのあり方や資本主義社会に対して問題提起することを出発点としており、スペキュラティブ・デザイン¹⁾やソーシャリー・エンゲイジド・アート²⁾の枠組みから暮らしのあり方を思索したものである。

1. 背景と目的

新型コロナウイルスの流行は私たちの暮らしを大きく変えた。その着用が義務付けられる中、マスクが不足した。これはマスクに限ったことではなく、トイレットペーパーや小麦製品、バターなどが店頭から姿を消した。国から各家に配布された2枚の布

製のマスクは「アベノマスク」と呼ばれ嘲笑されていたが、わたしは布マスクが新型コロナウイルスを予防できるものと理解し、布マスクを制作するきっかけとなり、《おすそわけマスク》配布のきっかけともなった。アベノマスクを着用している人をあまり見なかったのは発送時期が遅かった事やサイズが小さい事もあるが、別の物に交換されていたからである。リカーマウンテンではノンアルコールビール1本と、タピオカ専門店フロルフロルでは好きなドリンク1杯³⁾というように、物が金銭に代わる別の物と交換されていた事例があげられる。余剰資産（アベノマスク）を他者に分配（寄付）することが勧められていたからかもしれない。

新型コロナウイルスによって社会は困惑し、物の市場価値が崩れたように感じた。特にマスクに関しては、不足による値段の高騰、高値の転売が増えた。そのため、防止策として販売ルールが設定された。minneなどのハンドメイド販売サイトでは一時的にマスク販売を禁止するなど、本来簡単に手に入ったものが手に入らない日々が続いた。問題視したいのは、手に入れられない人が増えたことによるマスクの価値が高騰したことである。こんなに短期間で、物の価値が変動したものは近年他になかったのではないだろうか。私たちは生きていくために必要なものを生産する手立てを多くの人々が持っていないこ

とに気づかされた。そもそも私たちのこれまでの暮らしは何もかも人任せである。衣にしる、食事にしる、住居にしる、衣食住にまつわるほとんどのものは貨幣と物が交換される仕組みであるため、市場や産業が止まるとこれまで通りには暮らしていけない。マスクに限っては交換される価値に加え、希少価値が付随しマスクそのものの価格があまりにも高くなってしまった。本研究はマスクの交換価値から離れ、使用価値のためのものづくりとすることを目的に開始した。言い換えれば貨幣を介すことなく、マスクを配布（のちに共有に言い換える）することである。

1-1. 手芸と社会

戦後に構築された家族像と家庭像がある。既製品を購入することはできるが、手づくりすることがより深い愛情であることが、手芸雑誌のみならず女性雑誌などでも繰り返し喧伝された。手芸をする時間を、家族を想う時間であると読み替えて、女性たちは労力と時間をかけて家族のための日用品に手芸を施した。また、自分とその家族が暮らす家庭を素敵な空間にすることも愛情表現であるとみなされた。手芸品のあふれる素敵な家に住むことは家族への愛の証となった⁴⁾

市場からマスクが消えてから、手芸を得意とする人々はマスク作りに精を出した。緊急事態宣言が発令され簡単に外出できなくなってからは、家の中の時間の過ごし方が模索されるようになった。凝った料理を作った人もいれば、こまめに掃除をした人もいただろう。普段ささっとやり過ごしてしまう家事労働に時間を割くようになったのではないだろうか。これは緊急な事態であっても暖かな家庭を守りたいと願う様であり、人々は労力を暮らしの中に見出し、愛の証を模索していたように感じられた。

各家庭でのマスク作りが増える一方、布やマスク用ゴム、ミシンまでもが市場から消えた。マスクが販売されないことを知った手芸愛好家がつくり始め

たことに加え、世の女性に限らず、手芸初心者も自作マスクをつくり始めたためである。商品を購入する現象は井上雅人が『洋裁文化と日本のファッション』にこれまでの学校教育の中に生産することが消費者を生み出したと以下のように述べている。

洋裁学校は、洋裁の技術を教えるところではあったが、それ以上のものでもあった。洋裁技術は、社会進出の手段や主婦の職能と考えられてはいたが、実際には、生産技術や生活技術というより、社会的な弁別手段としての文化資本であった。洋裁の技術を持っているか、洋裁学校を出ているかどうかで、女性としての資質を判断されたのだ。洋裁学校が女子教育機関であることを自認し、衣服の作り方以外のカリキュラムを備えていたことも、そのことに貢献した。そういった教養主義によって、本来生活技術だった洋裁は、生活上の必然性に根ざしているとはいえないものになっていた。そのために、一九六〇年代の後半から七〇年代になると、自分の社会的位置を見極め、自分のアイデンティティを構築するために適切な場所で適切な洋服を買う技術が、洋服を作る技術に取って代わった。洋裁学校は、洋服を生産することを教える教育期間でありながら、正しく着るという消費活動を前提に成立していたために、結果的に、消費者を作り出す装置としてはたらいのたのだ。⁵⁾

たとえ作り手であろうとも材料を揃えるために消費者になってしまう仕組みが市場から資材や道具を枯渇させた。しかし、東日本大震災以降、手芸そのものが地域コミュニティを形成し得ることは既に実践されている。気仙沼の特定非営利活動法人生活支援プロジェクトKの「手しごとプロジェクト」や京都文教マイタウン向島の震災避難ママたちの「お裁縫会」⁶⁾などが挙げられる。各団体の取り組みは手芸を介しながら「被災者が時間をやり過ごしながら、少しずつ他者とのコミュニケーションを開いていくための機会にもなった⁷⁾」。災禍では手芸が拠り所となり、精神を支えていると言える。

オンラインとなった授業にはマスク制作を授業課題とした。何よりも重要なことは身の安全を確保するために、買っていたものを作るための情報収集とその実践が重要であると感じたからである。新聞でもマスクの型紙が印刷され、SNSでもマスクの作り方動画や手順写真が多く掲載されていた。物が今ほど溢れていなかった時代では、必要なものは自身で作る、あるいは既にあるものをそれに見立てて暮らしていた。人々は代用することを当たり前知っていた。他方、無いものは買えば良い時代に生きる人は、代用できるものでも代用することを選択肢に入れられない。そんな中、ハンカチとヘアゴムを用いて簡易マスクを作る方法や、靴下を数カ所切り簡易マスクを作る方法など、マスクが売ってなくても、マスク代わりにするアイデアがSNS上に共有されていた。これらは手芸を苦手とする人でも簡単に作ることができるため今日的な解決策である。

2. 実践

2-1. 《おすそわけマスク》の制作

森田に住んでいた今は亡き女性が遺した布、糸、衣を2018年から倉庫で保管している。2018-2020年にかけて主人を亡くした布を用いて《見知らぬ女性がのこした空》《見知らぬ女性からのおすそわけ》⁸⁾という作品を制作してきた。これまでに主人を亡くした布に新たな主人を迎えるため作品名に「おすそわけ」と付けてきた。今回はその布、衣、糸を資材として市場では手に入らないマスクを再生産し、おすそわけする。これらの作品と活動を《おすそわけマスク》とする。星野太が「ソーシャリー・エンゲイジド・アートは、慣習的な意味での「作品」を前提としない、社会的なコミットメントを重視する傾向にあるからだ。(中略) その評価基準が美的なものから社会(貢献)的なものへと明白に移行している」⁹⁾と述べており、自身の活動は作品を美的につくることを目的とせず、社会に対する提案・活動である。慈善活動とは似ても似つかぬことを追記しておきたい。

制作におけるルールは以下の2つとした。

金銭を介さない。

資材等を買わず、すでにあるものをくりまわし¹⁰⁾ながらつくる。

2020年4月7日から本学への入校にはマスク着用を求められた。それからほぼ毎日マスクをつくった。制作数は5,855個(2021年1月29日時点)で、素材は綿、絹、ポリエステル等様々である。その中でも絹素材が良いという宣伝を目にするが、今回制作したシルク素材のマスクはさほど減らなかつた。理由は2つ挙げられる。一つ目は受け手が一見してシルクとわからず、ポリエステルだと思ってしまうこと。2つ目は使用した絹製品が着物を解体したものや筆筒の奥深いところに眠っていた反物が多く、古い着物独特の匂いが染みついていること。他にも綿素材の硬めのマスクも残っている。反物は仕上げの際、糊を塗る。硬くされた布は洗濯すれば糊が落ちて柔らかくなるのだが、一触するだけでは硬すぎると思われるのだろう、新たな主人を見つけることができないマスクもあった。

2-2. 仁愛女子短期大学での配布



図1 設置風景

制作した《おすそわけマスク》を本学正面玄関の一角に設置した。宮城県石巻市のAAツール¹¹⁾の上にステンレス製のかごを置き、その中に《おすそわけマスク》を入れた。初日は前日につくった115枚全てを入れた。あっという間に《おすそわけマスク》は無くなっていった。それ以後学内の教職員やその家族、本学関係者、来校者に着用されている。それからほぼ毎日20-30枚ずつ補充した。

ほどなくして取材の申し入れがあったが、書かれた内容によってはクレクレ星人がやってくることも本研究の趣旨にむかない。断ることも出来たが、自身の考える活動が他方面でも広がることを願い取材を受諾した。案の定、新聞記事が掲載された後、いくつかの施設から100枚単位で寄付してくれないかと申し出があった。中にはこちらの感情を揺さぶるように「長いおつきあい」という言葉を持ち出す人もいた。大学内で設置している以上、関係施設等を無下には出来ないが、このアーティスト活動が慈善活動として期待されていたことがわかる。これらの期待に応えようと効率の良い物作りを目指していた。その結果、作っても無くなるだけの工場のような生産システムと同じ流れであることに気づく。資本主義社会についての問題提起であるはずの活動が、無報酬による労働搾取を自演していたと振り返った。自身が資本主義社会の闇を体験しただけでは意味がない。そう自問自答を繰り返しながら毎日マスクを制作した。最初の頃は立体マスクのみを制作していたが、制作過程に出てくる端切れ（ごみ）が気になりとなった。見知らぬ女性から受け継いだとは言え自身の所有物かと問われると所有ではなく、預かりものとしての認識が強い。だからこそゴミと化した端切れの処分の仕方を決定することができなかった。

ちょうどその頃、初夏を前に「涼しいマスクは無いのか。」と尋ねられる事が多くなり、浴衣を解いてマスクを作ろうと考えていた。浴衣は夕涼みや寝間着として使用される衣服である。夏を前に浴衣生地で作れば、マスクをつけていても暑苦しく無い。そして、着物は長方形によって構成されている。浴衣を解くと、小幅の反物がそのまま使え前述したごみ問題を解決する事ができる。生地を丸く切らなくても、幅なりにまっすぐ切り、それを折り畳めばプリーツマスクができる。

(図2)は立体マスクと端切れ、(図3)はプリーツマスクと端切れである。一見して(図3)の方が端切れが少ないことがわかる(図4)。加えて、端切れを継ぎ合わせて新たに布を再生産し、それをマスクに仕立てたものもある。これらは百徳着物¹²⁾やBORO¹³⁾の意匠を継いでいる。

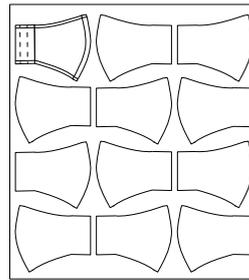


図2 立体マスクを端切れ

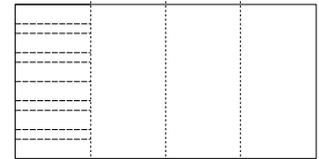


図3 プリーツマスクと端切れ

●立体マスク



●プリーツマスク



マスク4個をつくる際の
立体マスク、プリーツマスクの裁断時点での比較

図4 パターン配置比較



図5 つぎはぎプリーツマスク

2-3. 森田駅内ギャラリー（夢ギャラリー森田）での配布

1回目：2020年9月10日(木) - 10月5日(月)(図6)

本学に設置しているマスクと差別化するため、森田駅内ギャラリーに設置する《おすそわけマスク》には卒業生が考えたキャラクターや有機的な柄を蛍光顔料でシルクスクリーンプリントした。



図6 1回目展示風景



図7 キャラクターをプリントしたもの

2回目：2020年11月23日(月)－12月14日(月)(図8)

1回目の展示を終え、駅を利用する人から「あのマスクはもうないのか」と問い合わせが多かったらしい。たまたま2020年12月に本学の学生が森田駅を美術館にする活動を控えており、その中に特設ブースとして設置した。

じゃんじゃん取られないため、これらは亡き女性からのあずかりもので作られていることを示した(図9)。



図8 2回目展示風景



図9 展示キャプション

そもそも商品(量産品、消耗品)とは異なるものづくりをしているのだと、訴えたかったためである。「ご自由にお持ち帰りください」という言葉は使用しない。それは本研究を理解してくれた人のみが持って帰られる仕組みをつくる工夫である。大学内の設置かごは最終セールのようなあり様であったことを振り返り、できる限り荒らされず、恩着せがましいおすそわけを目指した。

2-4. 経過観察の思索―かごの中と棚の上

本学に設置したかごは最初の頃、中に入ったマスクが乱れていれば整えてくれる人がいた。マスクの御礼にとヤクルトのおばさんからヤクルトを、掃除のおばさんからはお茶を、非常勤の先生からタケノコごはんを、職員の方からはアイスをと、マスクと何か別のものが交換されていた。しかしこれらの現象は長期的に続くものではない。マスクは減る一方だが他の物に姿を変えて戻ってくるものでも、ことでもない。そもそも何かと交換したいがためにおすそわけをしているわけではないが、対価に変わる活動の価値や活動の意義について省察する日々が続いた。山崎明子は『近代日本の「手芸」とジェンダー』で手芸行為が「アマチュアで、家庭内にすべて還元されることに大きな意味があったためである。つまり、「手芸」は明らかに生産労働であるにも拘わらず、

無償の労働であり、再生産労働の一環として位置づけられてきたことを表している。¹⁴⁾」と述べている。つまり手芸的に再生産された《おすそわけマスク》への互酬性は期待できないことがわかる。カゴの中はワゴンセールのように見え、あれほど重宝されたマスクも乱雑に扱われているのだと思う頃が多くなってきた。これは消費者の物との付き合い方が顕著に表れている。「無償」の印象が強いのか、本学に設置したかごの中はいつもごった返していた。慈善活動と誤った認識下であれば尚更、配布された物に対して互酬性を期待してしまう。消耗品のさも売れ残りを象徴するようなあり様が人とモノとの対峙関係を示している。それは今も変わらない。

他方、森田駅に設置した机および棚の上はいつも整頓されていた。毎日観察したわけではないが、いつも綺麗に整えてあった。それはモノに対する敬意と見知らぬ女性の意志への尊厳の現れであろう。

3. 共有物としての考察

立岩真也の『私的所有論』によると「私達の社会にあっては、所有権とは、通常、所有しているものについてその処分の仕方(自らが保持するか、破棄するか、他者に贈与するか、交換のために使用するか)を決定できるということであり、所有権は即処分権を意味するが、その者のもとに置かれることと自らのもとから切り離す(処分する)ことを分けることは可能である。』¹⁵⁾とある。この所有することから、処分の仕方を決定する責務を追えないことに気づき、見知らぬ女性の遺した布、糸、衣を私と誰かとの共有物として捉えた。

これらのシナリオに対するボルハ＝ピリエルによる代案は、「脱植民地的であること」(グローバル・サウスの視点から世界を見ること)や共有物(集团的共有についての新しいモデルを生み出そうとするもの)について彼が近年に書いたものが教えてくれる。したがって、この美術館にとっての出発点は多数的な近代性(multiple modernities)であり、前衛的なオリジナルとそこから派生する周縁という観点から

考えられるひとつの美術史ではもはやない。なぜならその美術史は常にヨーロッパの中心性を優先視していて、一見したところ「遅れている」作品がそれら自身の文脈においては他なる価値をどの程度もつかということを見捨てるからだ。他方ここでの仕掛けは、共有物のアーカイブ (archive of the commons)、すなわちすべての人たちに開かれたコレクションとして新たに構想されるものである。なぜならば、文化とは、一国の財産の問題ではなく、ユニバーサルな資源の問題であるからだ。一方、この美術館の最終的な目的地は、もはや市場人口統計学がはじき出す多数的な鑑賞者層ではなく、ラディカルな教育 (radical education) である。芸術作品は、秘蔵の宝として理解されるのではなく、それを活用する者を心理的、身体的、社会的、政治的に解放する目的のために「相関的なオブジェ」(リジア・クラークの言葉を使うなら) として動員されるのである。ここでのモデルは、ジャック・ランシエールの「無知な教師」のそれであり、鑑賞者と美術館の間の知性の同等性という想定を基礎としている。¹⁶⁾

クレア・ビショップの言う「共有物」は本研究では見知らぬ女性の所有していた布、糸、衣である。制作をはじめた頃から自身の所有物であるという認識はなく、どこか他者の物を一時的に預かっているように感じていた。物そのものが手元から離れてゆく様子は引き取り手 (里親) が見つかった感覚である。これまでは生地や衣服、糸をそのまま譲っていたのに対し、今回は布を切り、縫っていることから差別化する必要があると感じてはいたものの、その行為への意味づけに戸惑ったところもあった。しかし、これまでの行為を振り返ると他者へ使用を委ねることが共通している。つまり、彼女から預かった布、糸、衣は他者との共有物であり、共有資源である。そして《おすそわけマスク》は商品ではなく共有するアイテムとして動員される。それらは心理的、身体的に身を守り、社会 (マイクロコミュニティ) へ解放されている。着用者

である他者と再生産者であるわたしとの間には見知らぬ女性の遺品そのものとそれらを集めた彼女の意図や想いを共有できると想定した。

4. マスクの着用

再生産のあり方を共有することの意義は模索できたが、物 (マスク) が飽和状態になった時、これらの仕組みには意味がない。おおよそ一年の活動を経て、最初の頃に比べれば《おすそわけマスク》の着用者もカゴの中のマスクの減り方も少なくなった。着用者には嗜好が働き、物への選別基準が生まれる。マスクは身を守るためのものであることを承知した上で、衣服同様にファッションアイテムとして認識されている。今日のコーディネートに色合わせを楽しんだり、お気に入りブランドのマスクを身につけたり、オシャレとして楽しむ方が優ってくるのだろう。着用者の着こなしの法則に従ってマスクは選ばれている。《おすそわけマスク》は既にある素材を用いているため、流行の機能や布の柄を選ぶことができない。他者に限ったことではなく、わたしも最初の頃はサステイナブルを実践し、既に使用していた3枚のウレタンマスクを使いまわしていた。しかし、ファストファッション企業、ハイファッションブランド、テキスタイルメーカーに至る衣を生業とする企業がマスクを生産、販売した。市場が飽和状態になってからはお気に入りのブランドマスクを買い着用したり、《おすそわけマスク》をつけたり、サステイナブルを承知した上で毎日異なるマスクをつけ替えている。でかけた先で珍しいマスクをつけている人を見ると、スマホを取り出し関連する単語を2-3個入力し、どこで売られているのかを調べ、購入したほどである。洗って使えることを商品価値と認めてはいるが、実態は消耗品を消費している。

消費者としての暮らしが長い分、物を消費することが当たり前となっている。新型コロナウイルスがたった1年滞在しただけでは、これらの仕組みが簡単に変わるわけがない。常に消費する社会の中で私たちの暮らしのあり方そのものを再考する必要がある。

5. 目指すべきものとまとめ

5-1. 他者の活動

わたしはアーティスト活動の一環としてマスク制作を行っていたが、実家へ帰るとアートやデザインとは関係のない、手芸好きの戸田さんが同じような活動を行っていた。自身の着なくなった服をマスクに仕立て、知人に配布する。その配布先から要らない布やストッキング、タイツ¹⁷⁾をもらい、またマスクを仕立てる。驚くことに戸田さんはミシンを使わず、手縫いである。市場から消えた、マスクもマスク用の生地、マスク用のゴム紐、ミシンさえも戸田さんにとっては必要なかったのである。わざわざ買わなくてもあるもので作るという主婦ならではのくりまわし方に感嘆した。作り手であっても消費者ではない女性を見た。大量に作る必要もなく、家族や知人のためだけに作ろうとする良妻賢母のあり方を守ろうとする女の姿である。これはコミュニティ最盛のあり方ではないだろうか。決して大きな祭りや大きな催事だけが地域活性ではなく、小さなコミュニティ形成こそが未曾有の時代だからこそ互いを支え合うことを認め、実践に導くように感じた。

5-2. マスク着用者の意識の変化

マスクの着用は「医療的行為」「マナー的行為」の二種に分けられる。そしてどのようなマスクをつけているかで、その人のコロナに対しての思考が一見できる。ほとんどの人はマナー的行為の象徴として着用していた。しかしあれほど重宝されていたウレタンマスクは効能が少ないとの研究結果が報道されると、医療的行為を目的とし不織布マスクをつける人が増えた。アパレル企業がファッションアイテムとして販売していたマスクはマナー行為的なものでしかない。布製のマスク商品には「布マスクは、ウイルス・花粉等を完全に予防・除去することは出来ませんので、予めご理解ください。」と明記されている。ほんの少し前まで「サステイナブル」な暮らしを求めていたため布マスクやウレタンマスクは洗って使える点からも持続可能なアイテムとして愛用されていたが、今となっては衛生面、清潔感を優先し使い捨ての不織布マスクが多く着用されてい

る。作って、つけて、捨てるという負の循環が身を守るためには必要不可欠であるという現実と向き合わざるを得ない状況になっている。

5-3. 暮らし中で共有のあり方を思索する

他者との共有も同様に行き詰まってしまった。あれほど「シェア」という言葉に囲まれていたにも関わらず、人と共有することに嫌悪感が生まれている。共有物は使用した後、必ず消毒することが慣習化している。自分より前に共有された痕跡は消毒液で拭き取られてしまう。コロナ禍では清潔さに安心を覚えるからである。サステイナブルでありながら人々が豊かであるための暮らし方を新たに見つけていかなければならない。

物を介して物語の続きを紡ごうとするとき、そこには金銭ではない価値が導かれる。共有しながら所有するという感覚は、譲り、託すという実践から見えてくるのだが、今日的な方法論ではない。しかし、ものそのものを実態的に所有することや共有することだけにこだわっていたわけではない。所有にしろ、共有にしろ、直接的な行為と間接的な行為に分けることができる。直接的な行為は簡単に言えば直に触れること。間接的な行為は物を介さず、物質的価値の意図や意識、思想を共有することである。今回の活動で共有したかった事は物そのものの物理的な共有ではなく、意思や思想の共有である。これらの思想の共有は人々に豊かさを与える。なぜなら、物には歴史があり、物語があることを知るだけで使用価値が高まるからである。遺品と言うと寂寥感が表立つが、ものに宿された想いには哀しさが無い。特に布は人の身体を肉体的、精神的に守るものとして認識され、着用、使用されている。見知らぬ女性は誰か(たぶん家族)の身体を守るために布や糸を集め、保管していた。わたしはその想いを汲み取りマスクに仕立て、大学関係者および森田に住む人々と共に「身体を守る」共有を実践した。それら全てを鑑みれば、見知らぬ女性が遺した布は私たちにとっての共有物(共有財産)であったと言えよう。社会の変動は私たちの思想を変容させた。それに伴い価値に対する評価基準も変わってきている。私たちはこれ

らを自認し順応できる思考力を高め、別の方法を受諾する必要がある。いかなる困難な時期であっても私たちはより良い暮らしを求めて思索し、創造し続けなければならない。亡き女性たちが愛の証と信じた手芸行為と人々を守ってきた布や衣への思想を引き続き共有していきたい。

参考文献

- 1) デザインの既成概念を変えていくというコンセプト・デザインに、市場や広告、大量生産に根ざした商業的文化に対する批判的な姿勢を加えることで、具体的な(社会的な、政治的な、あるいは倫理的な)方向性を与えるもの。アンソニー・ダン&フィオナ・レイビー著 監修/久保田晃弘 翻訳/千葉敏生 寄稿/牛込陽介『スペキュラティブ・デザイン 問題解決から、問題提起へ、-未来を思索するためにデザインができること』ビー・エヌ・エヌ新社/2015
- 2) SEA研究会は「現実社会に積極的に関わり、人々とのインタラクションや協働のプロセスを通じて、何らかの社会変革をもたらそうとするアーティスト活動の総称」と定義している。アート&ソサイエティ研究センター SEA研究会編『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜・理論・実践 芸術の社会的転回をめぐる』フィルムアート社/2018
- 3) いらない“アベノマスク”都道府県別【交換先、寄付先リスト】みんなの使い道は? https://japan-crc.com/ccn/news/2020_06_09_ti/ (2021-03-01閲覧)
- 4) 上羽陽子・山崎明子『現代手芸考 ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社/2020年/39頁
- 5) 井上雅人『洋裁文化と日本のファッション』青弓社2017年/127-128頁
- 6) 上羽陽子・山崎明子『現代手芸考 ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社/2020年/263-270頁
- 7) 上羽陽子・山崎明子『現代手芸考 ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社/2020年/258頁
- 8) 白、グレー、青の布をつなぎあわせ空に見立てたインスタレーション作品を《見知らぬ女性がのこした空》とし、人の集う場に展示した。その際使い切れなかった生地、糸、衣服は他者へおすそわけする物を《見知らぬ女性からのおすそわけ》とした。2020年意匠学会にて意匠学会作品賞受賞。
- 9) アート&ソサイエティ研究センター SEA協会編『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜・理論・実践 芸術の社会的転回をめぐる』フィルムアート社/2018/133頁
- 10) 本来くりまわしとは金銭など都合をつけてやりくりすることであるが、きものを解いて布にもどし、再び縫う「衣服と布の往来」もくりまわしと言う。
- 11) 東日本大震災を機に宮城県石巻市で発足した、デザイナーを中心に設立された地域のものづくりのための場「石巻工房」とトラフ建築事務所との共作。デッキ材だけでできたシンプルなDIYツール。DIY初心者でも作りやすいデザインとなっている。
- 12) 寄せ着物の一種。身体の弱い子供が丈夫に育つように、長寿の人や無事に育った子どもがいる家から端切れをもらい、それらを寄せ集めてつなぎあわせたもの。
- 13) 使い古して役に立たなくなった布やほろぎれ。木綿が貴重だった頃衣服に穴が空けば小さな布で繕いそれを着用して

いた。

- 14) 山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房/2005/287頁
- 15) 立岩真也『私的所有論』勁草書房/1997/29頁
- 16) クレア・ビショップ(訳者:村田大輔)『ラディカル・ミュージオロジー つまり、現代美術館の「現代」ってなに?』月曜社/2020/59頁
- 17) ストッキングやタイツを輪切りにしてマスク紐の代わりにするためである。



制作協力：岩田菜見